

教師教育スタンダードの設定と教職ポートフォリオの評価は

教職教育の高度化にいかに関与するか

―教員養成広大スタンダードとeポートフォリオの再検討をめざして―

研究代表者	川口 広美（社会系コース）
研究分担者	松見 法男（日本語教育系コース）
	竹下 俊治（自然系コース）
	米沢 崇（初等教育教員養成系コース）
	永田 忠道（初等教育教員養成系コース）
	影山 和也（数理系コース）
	吉田 成章（教育学系コース）
	森田 愛子（心理学系コース）

I 研究の背景と目的

1. 研究目的

本研究の目的は、教師教育スタンダードと教職におけるポートフォリオ評価が教職教育の高度化にいかに関与するのか、意義と限界を理論的・実践的に解明することである。

2. 研究の背景

教師教育の分野で大綱的な基準としての「スタンダード」が設定されるようになったのは、欧米を中心に進んだ「教育のスタンダード化」が加速する2000年代以降である（日本教師教育学会編『教師教育研究ハンドブック』学文社、2017年）。なお、スタンダードの設定主体は、国家や教育委員会などの行政主体のもの、学会や専門職団体などによるものなどがある。設定段階も、教員養成スタンダード、教師教育スタンダード、教育学スタンダードと多様である。

日本においては、ポートフォリオ評価がスタンダードと軌を一にして導入された。というのも、大綱的な基準としてのスタンダードの設定に伴い、評価指標としてのルーブリックと評価材としてのポートフォリオの導入が呼び込まれたためである。加えて、日本で導入が加速度的に進んだ背景には、教職実践演習の新設がある。新設に伴い、eポートフォリオ導入が奨励されたことが大きい（例えば、2017年度教育学部共同研究プロジェクト「ポートフォリオ評価を基軸とした大学における教職課程の改革に関する研究」（研究代表者：竹下俊治）<http://doi.org/10.15027/45426>を参照）。

こうした国内外の動向を踏まえ、広島大学教育学部は「教員養成広大スタンダード」を幼小・中高・養護の分野で整え、全学のeポートフォリオシステムの導入に踏み切った。国内の大学の多くが、教育学部における教員養成と教育学部以外の教員養成とを切り離す、あるいは統合的に運営しつつもその規模が小さいという状況であるにもかかわらず、本学では毎年約1,500件の教員免許所得希望学生の要望に応える全学的な体制でスタンダードとeポートフォリオシステムの運用がなされている点に意義が見出されてきた。

しかしながら、スタンダード・ポートフォリオの実施の年月が経過するにつれ、実施・

運用上での課題も明らかになってきた。例えば、広島大学の場合、運用上の課題として、ポートフォリオが学修の履歴を視覚化するシステムとして運用することに伴う課題があがっている。大学の学修システムと連動することのメリット（GPA や学修履歴と紐付けられ、セキュリティも高い）がある一方、デメリット（システム構築・改修が容易ではない）もあることが明らかになってきた（森田愛子ほか(2020)「ポートフォリオ評価を軸とした教職課程の構造化（２）：実習系科目およびフィールドワーク等による「教育観の形成」の検討と効果検証」『広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書』第18号、77頁）。こうした実施・運用面を踏まえ、再度、教職の高度化に資するスタンダード・ポートフォリオとはどうあるべきか、ここに振り返りと再構成の必要性を指摘できる。

本共同研究の学術的特色としては、2点がある。第1は、教員養成スタンダードの理論的意義や策定過程に注目するだけではなく、応用・実施過程における意義と課題を踏まえた批判的検討を行う点である。第2は、教師教育分野におけるスタンダード設定の動向の整理にも、一大学（連合大学院を含む）の教員養成の実践開発の提案にもとどまるのではなく、国内外の教師教育スタンダード設定の動向を整理した上で、広島大学としての「汎用的なスタンダード設定とポートフォリオ評価システム」の再構成に複数年がかりで取り組む継続的な研究である点である。本プロセスを研究成果として公開することで、今後の他大学への示唆を与えたい。

3. 今年度の研究課題と研究グループ

今年度は、次の3つの研究課題に取り組む

- ① 現在の教員養成スタンダードとポートフォリオについて、教職員はどのように実践・運用しているか。その意義と課題とは何か
- ② 現在の教員養成スタンダードとポートフォリオについて、学生はどのように実践・運用しているか。その意義と課題とは何か
- ③ 先行大学でみられる教職の高度化に資する教員養成スタンダードとポートフォリオとはどのようなものか。

この内、③については3月下旬に訪問予定であるため、執筆時点では詳細を記載することはできない。そのため、本稿では主に①と②に焦点を当てて、執筆する。

（川口広美*・吉田成章*）

Ⅱ 教職員による教員養成スタンダードとポートフォリオの実践・運用の実態

1. 調査の概要

本研究では、教師教育を主導する理念・構想としての「スタンダード」の設定と、学習の履歴を振り返るためのツールとしての「ポートフォリオ」の運用、そして教職実践演習を軸としたポートフォリオ評価の実践の意義と課題を明らかにすることを課題として、広島大学において教員養成に関わっている教職員への調査を設計した。本研究で実施する調査は、質問紙調査とインタビュー調査である。

質問紙調査およびインタビュー調査で質問内容は、本共同研究プロジェクトメンバーにて協議の上、以下のように設定した。

- ①「教員養成広大スタンダード」をいつ、どこで知ったか？
- ②「教員養成広大スタンダード」は、どのような場面で活用されたか？
- ③育成したい（or なりたい）教員像はどのようなものか？
- ④「教員養成広大スタンダード」と③（なりたい教員像）を比べた際の共通点・相違点は何か？
- ⑤現状の e ポートフォリオは自らの教員としての学習歴を見直す際に効果的だと思うか？
- ⑥（効果的だと思うなら or 思わないなら）それはなぜか？
- ⑦現状の e ポートフォリオの利点と課題は何か？（システム、運用体制、教育・連絡）
- ⑧教員養成の改善に向けたスタンダードと e ポートフォリオの方向性とは？

質問紙調査の実施時期は、2023 年 1 月～2 月である。対象は、幼稚園教諭教員養成課程・小学校教諭教員養成課程・特別支援教育教員養成課程に関わる広島大学教育学部の教員、広島大学教育学部学務委員会委員（スタンダードをポートフォリオ運営に関わる教務を統括しているため）、教職実践演習担当教員（教育学部教員、医学部教員、歯学部教員）、である。質問紙は Microsoft Forms で作成し、それぞれの教員にインターネットでの回答を依頼した。本報告書原稿執筆時点での回答総数は、27 件である。上記の 3 つの属性の教員からおおむね満遍なく回答が得られた。

インタビュー調査は、教育学部教員を対象とした調査、および教員養成 WG メンバーを対象とした調査の二つを実施した。教育学部教員を対象とした調査は、2023 年 2 月 7 日（火）9:00-10:00 に、中学校・高等学校の技能系の教科を担当している教員 2 名を対象に、本共同研究メンバーの影山・竹下・吉田の 3 名で実施した。インタビューは録画・録音の上、発話記録を作成し、分析・検討の資料とした。教員養成 WG とは、広島大学の全学組織である教務委員会に教務委員長を座長として設置され、全学の教員養成について審議・調整するために 2021 年度に設けられた組織である。教員養成 WG は、教務委員長を座長とし、教育学部長が副座長をつとめ、教職課程を設置する各学部（教育学部・文学部・総合科学部・文学部・理学部・医学部・歯学部・薬学部・工学部・生物生産学部・情報科学部）の教員・支援室スタッフより構成されている。教員養成 WG を対象としたインタビューは、2023 年 2 月 28 日（火）および 2023 年 3 月 28 日（火）に開催される教員養成 WG 後にオンラインにて実施する予定である。本原稿執筆時点ではその内容について言及することはできないが、全学レベルでの教員養成の運用・システムの意義と課題の一端を浮き彫りにできるものとする。

2. 質問紙調査に見られる実践・運用の実態

Forms にて実施した質問紙調査の結果をまとめ、そこから見えるスタンダード・ポートフォリオの実践・運用の実態に言及する。

まず、①“「教員養成広大スタンダード」をいつ、どこで知ったか？”という質問項目には、「教員養成広大スタンダード」のリンク (<https://eport.hiroshima-u.ac.jp/hirodaistandard/>) も添付して回答を依頼した。その結果は、「着任以前から」：3 件、「着任直後」：7 件、「『教職実践演習』を担当してから」：14 件、「その他」：3 件、であった。回答者の内多くの教員が、着任直後から、教員養成に関わる授業を担当していると想定される一方で、教職実

実践演習を担当し、実際に 8 規準に基づくレベル判定に携わるようになった時期に知ったという点で想定とずれていることがわかる。「その他」については記述欄を設けていないため、その内実は不明である。

次に②“「教員養成広大スタンダード」は、どのような場面で活用されたか？”という質問項目には、複数回答を可として回答していただいた。その結果は、「教職科目」：5 件、「教育実習指導の場面で」：8 件、「教職実践演習の場面で」：26 件、「授業以外の指導や学生自身の学修の場面で」：6 件、「その他」：2 件、「活用されていない」：1 件、であった。活用されていないとする回答一件を除けば、全員が「教職実践演習の場面で」を選択していることになる。ここでは、教育実習指導の場面および授業以外の場面でも活用されているとする回答にも注目しておきたい。

回答者のめざす③“育成したい (or なりたい) 教員像はどのようなものか？”という質問項目には、自由記述にて回答をしていただいた。それぞれの教員の立場から多様に記述されているが、例えば教科の内容や教育の内容に関する知識を有するとともに、自らでカリキュラムデザインができる教員、省察・研究し続ける教員、といった回答が得られた。さらに、④“「教員養成広大スタンダード」と③(なりたい教員像)を比べた際の共通点・相違点は何か？”という質問項目は、自由記述にて回答をしていただいた。共通点としては例えば、教科に対する専門性や生徒理解という点や、基本的な知識部分、といった点が挙げられ、すぐれて一致しているとする意見もあった。他方で、規準の数が多すぎるといった意見や、探究的な取組を盛り込みにくい、といった意見も見られた。③と④の回答からは、本研究をさらに発展させていく上で、広島大学がどのような教員養成を行っていくのか、またその理念がいかにスタンダードに盛り込まれていくのかを検討していく重要な視点が提起されている。内容としての方向性と共に、そもそもスタンダードが基本的な部分を保障するミニマムエッセンシャルであるのか、それとも方向性や理想を示す目標であるべきか、といったスタンダードの定義そのものについての回答も見られた。

次に、e ポートフォリオについてである。⑤“現状の e ポートフォリオは自らの教員としての学習歴を見直す際に効果的だと思うか？”という質問項目は 4 件法で回答をいただいた。その結果は、「とても効果的」：4 件、「やや効果的」：16 件、「あまり効果的ではない」：6 件、「まったく効果的ではない」：1 件、であった。約 4 分の 3 の回答が概ね効果的だと捉えているが、4 分の 1 の回答は効果的だとは捉えていない回答となる。

その上で、⑤への回答の理由を尋ねる⑥“(効果的だと思うなら or 思わないなら) それはなぜか？”では、質問項目では、規準に照らした評価では反省的实践家は育たないのではないか、ファイルにデータを閉じることにどのような効果があるのかわからない、といったポートフォリオ評価に係る重要な意見が回答された。あまり効果がないとする回答者も、効果的とする回答者にも、おおむね、自身の履歴を振り返って省察・反省することには意味がある、とする向きでは共通している。この点に関わっては、ポートフォリオ評価事態の意味の共有の必要性と共に、育てたい教員像、さらにどんな教員になろうとしているのかという学生が目線からの今後の検討が重要となると思われる。

⑦“現状の e ポートフォリオの利点と課題は何か？(システム、運用体制、教育・連絡)”という質問項目には、利点として学生の学びを可視化し電子上で閲覧・管理が可能であることが挙げられる一方で、学生からすれば課題・タスクをこなすのみとなってしまうとい

るのではないかとする意見が回答された。

⑧“教員養成の改善に向けたスタンダードとeポートフォリオの方向性をどのように考えますか？”という質問項目は、⑦の質問項目とも連動する質問項目である。運営する教員や事務手続きの視点からだけではなく、教員と学生がともにこれからの方向性を捉えていく必要があるといった意見や、費用対効果としてこのシステムを続けていくことの妥当性を懸念する意見などが見られた。

本稿を執筆する時点では、27件の回答が寄せられた段階であるため、これ以上の細かい分析は提示することはできないが、寄せられた意見をより詳細に検討し、教師教育におけるスタンダードの設定とポートフォリオ評価のあり方そのものに還元するものを考察していく予定である。

3. インタビュー調査に見られる実践・運用の実態

教育学部教員を対象としたインタビューは、上述した①から⑧の観点を原則として、スタンダードとポートフォリオについてそれぞれの意見を出し合う形で実施した。インタビューは2名であり、スタンダード導入の時期（2010年度）に前後して、実技系教科の教員養成に関わってきている。インタビュアーの3名は10年以上、本学の教員養成に携わっている。

インタビューでは、求める教員像はスタンダードとして掲げられている文言によって概ねカバーされているが、いつも自覚されているわけではなく、すべてが講義や演習の目標とされているわけではないことが言われた。特に教科内容に関わる規準1の指す範囲が広く、学生個々の目指す教員像としてより具体にせねばならないことが言われた。また、「広島大学における教員養成」の置かれている位置やその特殊性についても議論がなされた。具体的には、教育学部と教育学部以外の学生とで同一講義を履修するなど、両者を同一視した体制にある一方で、実質的に教育学部のみの学生を対象とした教職課程の運用となっていることもあり、スタンダードやポートフォリオの実践・運用の捉え方も異なってくることが明らかとなった。

最後に、4年間の学修過程をまとめたポートフォリオは、教員としての入職後にどのように扱われているか追跡されていないことが話題となった。現状では、教員のライフステージに見合う枠組みとはなり得ていないが、今後の運用上の課題として、評価対象としたリソース（演奏や作品など）を広げるなど、教員養成段階のみに閉じないスタンダードの構想およびポートフォリオシステムの運用も求められるのではないだろうか。

本研究では、質問紙調査とインタビュー調査によって、今後のスタンダードやeポートフォリオに関する検討課題やそのための視点を明確にしてきた。これらの視点や論点を今後の研究につなげていくことが課題である。

（吉田成章*・影山和也*・竹下俊治*・永田忠道*）

Ⅲ 学生による教員養成スタンダードとポートフォリオの実践・運用の実態

1. 調査の概要

本研究では、教師教育を主導する理念・構想としての「スタンダード」の設定と、学習の履歴を振り返るためのツールとしての「ポートフォリオ」の運用、そして教職実践演習

を軸としたポートフォリオ評価の実践の意義と課題を明らかにするため、広島大学において教員養成課程に在籍する学生への調査を設計した。学生に対しての調査は、実態を深く尋ねることを基本としたため、インタビュー調査とした。

初等教育教員志望学生については、2023 年 1 月に教職実践演習（幼・小）を受講した教育学部第一類初等教育教員養成コース 4 年生 3 名（女性 2 名、男性 1 名）にインタビュー調査（15-20 分間程度）を実施した。中等教育教員志望学生については、2023 年 2 月に教職実践演習（中・高）を受講した第二類～第四類の 4 年生（女性 2 名、男性 1 名）に対してインタビュー調査（30-45 分程度）を実施した。教職実践演習後の 4 年生を対象とした理由は、4 年間でのスタンダードの学びを踏まえて述べてほしかったためである。なお、インタビュー中にインタビュー内容を記した資料及び各自の抽出ポートフォリオを手元で確認できるようにした。

インタビュー内容については、教員調査の項目を踏まえて、下記の通りに設定した。

- ① 広島大学スタンダードをいつ、どこで知ったか？
- ② 広島大学スタンダードは、どのような場面で活用されたか？
- ③ 育成したい（or なりたい）教員像はどのようなものか？
- ④ 広島大学スタンダードと③（なりたい教員像）を比べた際の共通点・相違点は何か？
- ⑤ 現状の e ポートフォリオは自らの教員としての学習歴を見直す際に効果的だと思うか？思わないか？
- ⑥ （思うなら or 思わないなら）それはなぜか？
- ⑦ 広島大学 e ポートフォリオの利点と課題はどこか？（システム、運営に関わる体制、教育・連絡）
- ⑧ 教員養成の改善に向けてのスタンダードと e ポートフォリオの利点と改善は何か？

2. 初等教育教員志望学生による実践・運用の実態

本節では、インタビュー内容の順に沿って、初等教育教員志望学生による実践・運用の実態の概要について報告する。「①広島大学スタンダードをいつ、どこで知ったか？」について、学生たちは 3 年生の教育実習前に初等教育教員養成コースで実施される広島大学スタンダード及びチェックシート 1 を用いた「振り返り 1」の機会を挙げていた。「②広島大学スタンダードは、どのような場面で活用されたか？」について、学生たちは先述の「振り返り 1」や教職実践演習（幼・小）の第 1-5 回に行ったゼミ単位の「振り返り 2」や第 14-15 回の講義のまとめに活用していた。1 名の学生については、教員採用試験の際に広島大学スタンダード及びチェックシートを活用したと述べていた。

なお、「③育成したい（or なりたい）教員像はどのようなものか？」と「④広島大学スタンダードと③（なりたい教員像）を比べた際の共通点・相違点は何か？」について、3 名の学生は、自身のなりたい教員像（1 名については自身のなりたい職業像）を語るとともに、広島大学スタンダード、特に規準 6、7、8 にかかわる共通点と相違点があると述べていた。学生はなりたい教員像として「個人ごとに合った関わり方ができる教員」「子どもの目線にたって考えらえる教師」といった子どもに即した指導を行えるようになりたいと考え、とりわけ規準 8 には親和性を覚えていた。なお、スタンダードがあることによって、自分が不十分だと思う点や教員養成課程の中で学んだ内容とのズレに気づくといっ

た成果が上がっていた。

最後に、「⑤現状のeポートフォリオは自らの教員としての学習歴を見直す際に効果的だと思うか？思わないか？」と「⑥（思うなら or 思わないなら）それはなぜか？」について、学生全員が「効果的だと思う」と回答した。その理由として、eポートフォリオにアップロードした広島大学スタンダードに関する自己評価と振り返りを記載したチェックシートを用いて、教職実践演習で振り返ることで自分の成長や大学での学びを確認できると語っていた。「⑦広島大学eポートフォリオの利点と課題はどこか？（システム、運営に関わる体制、教育・連絡）」と「⑧教員養成の改善に向けてのスタンダードとeポートフォリオの利点と改善は何か？」については、学内外のネットワークからアクセスしやすいようにすることと、1年生の段階から、広島大学スタンダードやeポートフォリオについて周知することなどを挙げられていた。

3. 中等教員志望学生による実践・運用の実態

本節では、インタビュー内容の順に沿って、中・高等学校の教員免許取得を主目的とするコースに所属する学生による実践・運用の実態の概要について報告する。「①広島大学スタンダードをいつ、どこで知ったか？」については、コースごとの差がみられた。コースによっては、1年次の教員免許取得ガイダンスから各規準について丁寧な説明があったところもある一方で、4年次の教職実践演習までほとんど見られていないという回答もあった。これは、「②広島大学スタンダードは、どのような場面で活用されたか？」についても反映されていた。1年次から丁寧にガイダンスが行われているコースにおいては、2年次・3年次での授業において各規準を意識して受講が行われていた一方で、4年次までほとんど取り上げられていないとした学生もいた。このようにコースによって、スタンダードについての説明の度合いや頻度については差があることが明確になった。

次に、「③育成したい（or なりたい）教員像はどのようなものか？」と「④広島大学スタンダードと③（なりたい教員像）を比べた際の共通点・相違点は何か？」についてである。「③なりたい教員像」については、教科の幅広い知識やスキルを持っていること、自分の考えを表現できる場を設定してあげること、など多様な考えを示していた。④では、こうした理想の教師像に対して、ある学生は広大スタンダードを「完成形」として、それに沿って理想の教師像を作り上げていた。それに対して、スタンダードと理想像は全く別と認識されていたり、「自分は特に規準1～4が重要だと思っている」というように、自分の理想像を表現する手段として用いている場合もあった。「スタンダード」とは何かに対する認識の違いがより明確になった。

最後に、「⑤現状のeポートフォリオは自らの教員としての学習歴を見直す際に効果的だと思うか？思わないか？」と「⑥（思うなら or 思わないなら）それはなぜか？」について、学生全員が「効果的だと思う」と回答していた。その理由として、eポートフォリオにアップロードした広島大学スタンダードに関する自己評価と振り返りを記載したチェックシートを用いて、教職実践演習で振り返ることで自分の成長や大学での学びを確認できたことや、自分の課題が見えてきたことなどがあげられていた。「⑦広島大学eポートフォリオの利点と課題はどこか？（システム、運営に関わる体制、教育・連絡）」と「⑧教員養成の改善に向けてのスタンダードとeポートフォリオの利点と改善は何か？」については、学

内外のネットワークからアクセスしやすいようにすることや、システム自体がわかりにくいことなどがあげられていた。とりわけ、インタビュー対象の4年生は、2年次よりCovid-19の影響を強く受けており、ポートフォリオ作成の意見交換ができなかったことなどが難しさの理由として挙げられていた。それを踏まえて、同じ教員免許を取るためのネットワークづくりをHPで行うこともよいのではないか、といった意見があげられていた。

本研究では、インタビュー調査によって、学生の立場から今後のスタンダードやeポートフォリオに関する検討課題やそのための視点を明確にしてきた。これらの視点や論点を踏まえて、来年度以降大規模な質問紙調査を行い、より学生の視点からのニーズや課題を明確にする必要がある。

(川口広美*・米沢 崇*・松見法男*・森田愛子*)

IV 研究の成果と今後の課題

今年度の主な研究成果は主に二つである。1点目は、教員調査を行い、教師教育スタンダードとポートフォリオの活用の実態が明確になったことである。大学教員ごとに受け止めがかなり多様であることが明らかになり、スタンダードやポートフォリオについて指導する立場であるはずの、大学教員自身が教職実践演習を担当するまで理解していない可能性がある点や、「スタンダードとは何か」に関する認識の多様さ、ポートフォリオの効果に対する受け止めなどについては顕著であった。2点目は、学生調査を行い、使用する学生の視点からのスタンダードとポートフォリオの活用の実態が明らかになったことである。教員調査と比べると、学生たちはスタンダードとポートフォリオに対して肯定的な回答が多く見られた。ただし、こうした回答の裏には、コースによってスタンダードとポートフォリオに関する理解や使用実態がかなり異なっており、それによって学生の認識に影響を与えられていることが示唆された。また、ポートフォリオシステムを自省のためのツールとしてだけでなく、他者との交流のツールとして用いるといった新しい可能性を示唆されたのは興味深い。

今後は、1年目で培った基礎データを踏まえて、より大規模な調査を実施し、幅広い声を収集すること、及び、教員へのスタンダードやポートフォリオの説明をどのように行っているか、といった点や、ポートフォリオシステム等について先進的な大学を訪問し、共同的に探究する可能性を探っていきたい。さらに、日本国内で、本テーマについて、一緒に研究できるパートナーを探す場も提供していきたい。

(川口広美*・松見法男・竹下俊治・米沢 崇・永田忠道・影山和也・吉田成章・森田愛子)